



メディアの意味と特性を知る

教科情報の取り組み

岡本 弘之

<抄録>

高等学校情報科の教科書ではメディア・リテラシーをどう取り上げ、また教科書の内容に沿ってどのような授業実践が行われているのだろうか。本稿では情報科の授業の中で行うメディア・リテラシー教育について、勤務校で実践した授業実践を紹介したい。

<キーワード>

メディアリテラシー、高校、情報科、授業実践

1. はじめに

高等学校学習指導要領改訂により平成25年度より情報科は「社会と情報」、「情報の科学」に再編され、「社会と情報」の目標では「情報の特徴と情報化が社会に及ぼす影響を理解させ、情報機器や情報通信ネットワークなどを適切に活用して情報を収集、処理、表現するとともに効果的にコミュニケーションを行う能力を養い、情報社会に参画する態度を育てる」こととしている。⁽¹⁾

「情報を収集、処理、表現」を行うためには、「受け手として情報を読み解き、送り手として情報を表現・発信する」メディア・リテラシーの育成は不可欠であり、情報科学習指導要領解説にはメディア・リテラシーという言葉の記述は見られない、教科書「社会と情報」では6社8冊中の6冊にその記述がみられる。⁽²⁾

本稿では情報科教科書におけるメディア・リテラシーの記述を紹介し、その内容に沿った授業実践を紹介する。

2. 情報科教科書におけるメディアリテラシーの説明

「社会と情報」教科書の中で、メディア・リテラシーについて一番詳細に記述する日本文教出版社「社会と情報」教科書⁽³⁾では、メディア・リテラシーを「メディアの特性を理解した上で、受け手として情報を読み解き、送り手として情報を表現・発信するとともに、メディアのあり方を考え、行動していくことができる能力」と定義し、4ページを割いて説明をしている。(下表)

表1 情報科教科書の「メディア・リテラシー」の記述

教科書の小見出し	本文の概要
A.メディアと現実の認識	情報を鵜呑みにして「現実」と認識することの危険性

B.メディアの影響力	メディアが規範や価値観、世論の形成にも影響を与える
C.メディアの限定的な効果	選択的にメディアに接触すれば影響力を限定的にできる
D.送り手の意図によって語られる「事実」	メディアが伝える情報は送り手の意図により構成される
E.情報を発信する責任	発信の責任を自覚し、情報の信憑性や表現への配慮が必要

これらA～Eを説明した上で、最終的に「メディアの特性を理解し、多様化するメディアを上手に活用し、メディアを健全な社会の発展に役立てる」ために、「メディアリテラシーに磨きをかけよう」とまとめている。

3. 授業実践の紹介

この教科書の記述をふまえ、昨年度勤務校の高校1年生「社会と情報」で実践した授業を紹介していく。

(1) 授業のねらい

教科書に記述されたメディアリテラシー(表1)の中のA～Dの項目を意識し、情報の受け手として批判的(クリティカル)な視点で読み解く実習を行った。

(2) 展開

授業開始時にワークシートを配布し、最初に本時の目標であるメディア・リテラシーの定義を教科書に沿って確認し、実習に入った。

①実習「TVショッピング番組を批判的に読み解こう！」

「ダイエット器具」と「健康食品」の2本のTVショッピング番組の映像を用意し、「これから見る映像の中の情報について、疑いながら見ていこう。」と指示し、全員で視聴した。いくつかの場面で映像を止め、生徒に気づいたことについて意見を求める形で、授業を進めた。

②実習「ステレオタイプな表現を発見しよう！」

クリティカルな視点をさらに広げていくために、TVや漫画・映画などでみられるステレオタイプな表現を探し実習を行った。最初に「高校野球は感動的でないといけない」といった例をあげて、個人や周りの生徒と相談しながらワークシートに例を書かせ、発表させた。

(3) 実習の結果(生徒のコメント・反応)

大阪の「つつこみ」を入れる文化が、今回の「クリテ

*1 OKAMOTO Hiroyuki : 聖母被昇天学院中学校高等学校 (大阪府箕面市如意谷1-13-23)

ィカルに読み解く」というテーマと重なるのか、生徒たちは積極的に気づいたことをあげていた。

①実習「TVショッピング番組を批判的に読み解こう！」

1本目はダイエット効果があるという運動器具を紹介する番組。途中ダイエットの効果を写真とグラフで示すシーンで映像を止めて、気づくことをあげさせた。

生徒1「画面の隅に小さく『本製品による運動と食事制限を行った結果です』と書いている。「食事制限してダイエットできるのは当たり前やん」

生徒2「グラフの数字が途中省略させて、グラフが大きく変化したように見せている」

生徒3「写真について、Beforeはお腹を膨らませ、Afterは息を我慢しお腹をひっこめて写真を撮っているのかもしれない」

視点を与えて映像を読み解く中で、画面の隅に書かれた小さな文字を発見し、グラフの表現方法・写真の撮り方への疑問などに生徒は気づいた。

2本目は目の疲れを取るという健康器具。使ってる人が「効果がある」と語る証言のシーンで映像を止め、気づくことをあげさせた。

生徒4「画面の隅に『あくまでも個人の感想であり、効能・効果を示すものではありません』と書いてある。これを見たら証言の信ぴょう性は低くなる」

生徒5「映像の『よく効く』というインタビューに目が行くので、この小さな文字は気づかへんわ。」

その他製品の説明部分でも「よく考えたら、こんな機能はいらぬ」など、様々な意見が出てきた。

②実習「ステレオタイプな表現を発見しよう！」

TVなどでみられるステレオタイプの例として、生徒が発表したり記入した例をいくつか紹介する。

ステレオタイプの例

- ・ サスペンスの最後は海辺や崖の上
- ・ 血液型古い A型は几帳面 など
- ・ 日本人は真面目
- ・ 刑事はトレンチコート
- ・ メガネをかけている人は真面目
- ・ クラスの紹介文は「明るく個性的」
- ・ 理系女子は理屈っぽい
- ・ アメリカ人は陽気
- ・ 大阪人は値切る
- ・ ヤンキーはリーゼント頭
- ・ ドラマの父親は頑固者

図1 ステレオタイプの例

TVの中で描かれるステレオタイプな表現や、血液型や大阪人のイメージなど社会の中にあるステレオタイプな表現など、身近な例がいくつも浮かび上がってくる。

(4) 授業のまとめ

これら実習の後、①では「メディアの情報を鵜呑みにすることの危険性」について、②の実習では「メディアが流す情報は私たちのステレオタイプなイメージを作る」ということを話し、「受け手として情報を読み解く」ときに、クリティカルに読み解くことの大切さを、本時の授業のまとめとして説明した。

4. 情報科の授業とメディアリテラシー教育

今回教科書の内容に沿った授業を紹介したが、情報科とくに「社会と情報」の科目では、メディア・リテラシーについての授業を行える場面がたくさんある。

例えば発信者の責任の部分では情報モラル・法律など表1「E. 情報発信する責任」の指導を、映像制作などの実習場面では、制作体験の後に映像の特性を考えさせ、映像がすべてを伝えないことや、映像は編集者の意図により作られることなど表1「D. 送り手の意図によって語られる事実」を実感として理解させることもできる。⁽⁴⁾

映像を作ってみて・・・

- ・ 映像は「切り取られる」「編集されたもの」
 - 映像は一部しか伝えない
 - どの部分を使うかは編集者の意図が働く
- ・ 「やらせ」と「演出」の境界はあいまい
 - 映像のため普段しない行動をさせるのは？
 - 取材で打ち合わせたとおり話してもらうのは？
- ・ 映像は「イメージ」を作る
 - 映像を見て新たに思った印象・イメージはないか？
 - 映像を使うTVの影響力が大きい！

図2 映像制作後の振り返り授業スライド

情報科の目標である「情報社会に参画する」人物を育てるには、情報の受け手や発信者としてのメディア・リテラシー教育を欠かすことができない。メディア・リテラシーをしっかりと身につけた「賢い大人」を育てるために、今後も情報科の授業を開発・実践していきたい。参考文献

(1)文部科学省(2010)「高等学校学習指導要領解説 情報編」開隆堂

(2)中橋雄(2014)「メディア・リテラシー論」北樹出版

(3)水越・村井・生田編(2013)「社会と情報」教科書,日本文教出版

(4)岡本弘之・浅井和行(2014)「メディア・リテラシーを育てる情報科の授業」日本教育メディア学会第21回発表論文集,pp.160-161